

水試の

# 何でも魚ツチング

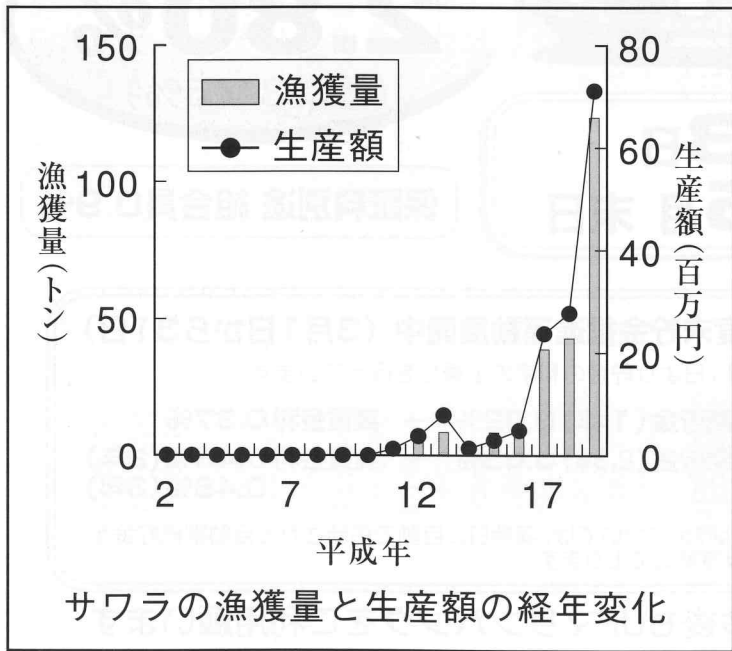
No.55

「さわら」よ、何処から来たたりて、何処へ行く?

魚偏に春とはさわらのこと、関西では春の魚の代表とされています。近年、日本海側の各府県でさわらの漁獲量が急増しており、県内でも昨年は124トン弱7千万円と魚種別水揚げ金額の十傑にも入る水揚げがありました。最近は利用方法や販路が開拓されているためか単価も600円/kg前後と漁獲量急増の影響はまだ見られません。平成2年に漁協の魚種銘柄へ「さわら」が加わってからの統計がありますが、平成10年までは1トンにも満たなかった漁獲量が平成16年までは18トン、平成17、18年は40トン程度、昨年はその3倍にまで急増しています。漁業種別では9、12月のはえなわによる漁獲量が100トン強で、年間漁獲量の8割強になっています。また、漁獲される大きさも1kg台が8割強と「x(1)し」と呼ばれるサイズで多く漁獲される能登半島以西とは若干異なっています。

日本海に回遊して来るさわらのふるさと(産卵場)は東シナ海の中央部とされています。産卵期は5、6月で、「x(1)し」と呼ばれるサイズは当歳魚で、秋には体長40cm体重0.5kgになり、極沿岸にも回遊し定置網に入網します。最近では山形県沿岸でも越冬しているようで、冬期にも若干の漁獲があり、昨年秋季に山形県沿岸で多く漁獲された1kg台のさわらは1歳魚のようです。

日本海側の各府県で漁獲量が急増して



いると前述しましたが、特に京都府ではここ2年はさわらの漁獲量が日本一となっており、平成18年は170トンを超えています。その多く(7割程度)は「さごし(1kg未満)銘柄だそうです。

京都府の報告では、産卵期に向けて成熟が進むものの、完熟個体は確認されず、別の海域に産卵回遊していくと考えられており、さわらの日本海への回遊は成長するための餌を求めた回遊のようです。というわけで、さわらは東シナ海から成長するためにやってきて、産卵のために帰っていくというのが答えのようです。しかし、何故、今まであまりみられ

なかったさわらが日本海の北部海域まで回遊するようになったのはさわら本人によつくと聞いてみないと分からないでしょう。

やっかいもののエチゼンクラゲを主とする大型クラゲの大量来遊も時期を同じくしており、同じ東シナ海をふるさととしています。東シナ海の環境の変化が大きな要因のような気がしてなりません。自分にも手の出せない場所のこと、その筋の研究が進むことを願ってやみません。

水産試験場 海洋資源部 鈴木 裕之